



北海道の再発見、新しい歴史の創造へ！

沢岡 信広

立場を変えると、新しい出会い、再発見がある。

年度末目前の三月二日、「監査委員」

の仕事で網走市内にある道立病院に向く新千歳空港から女満別空港への機内、陽光輝く眼下の冬景色を眺めながら、狭い座席のテーブルで、この原稿を書き始めた。

今の仕事である道議会選出の監査委員は、知事から辞令を受けた平成二二（二〇〇九）年七月に遡る。

監査委員は、地方自治法に定められ

た独任制の機関として、知事の指揮監督を受けずに、独立した立場で職務を遂行する。

道議会選出の監査委員の職務は、広範な分野を専掌する道の部局・出先機関の「財務に関する事務の執行」（収入、支出、契約、現金等の出納保管、財産管理等の事務の執行）や「経営に係る事業の管理」（公営企業など収益性を有する事業の執行）が、法令に準拠して適正に行われているか、効果的、合理的、能率的に行われているかを監

査することである。道財政の健全化判断比率審査、資金不足比率審査、決算審査、資金運用状況審査、現金出納検査（例月出納検査）、財政援助団体等の監査、指定金融機関等の監査、職員の賠償責任に関する監査、住民監査請求による監査を含めて、行政監査、随時監査、議会からの請求に基づく監査、知事要求に基づく監査など、道行政全般にわたる大きな権能を有しているので、反面、その役割と責任は極めて重い。

◇

◇

顧みて、その責任の一端を全うできたのだろうか、自問自答する。

私が監査委員に就任した動機は、平成一六（二〇〇四）年から平成一七（二〇〇五）年にかけて、道民世論を騒がした「道警不正経理問題」であった。現在、道は厳しい財政運営を余儀なくされている。道民の血税を有効に



使う政策の選択、事業効果の高い道政執行は喫緊の課題だ。道民から厳しく指摘された行政組織の不正経理に象徴される税金・公金の無駄遣いは、納税者である道民の理解を、到底、得ることはできない。監視機能、チェック体制の不充分さが指摘されながら、道民の道政不信を払拭することができなかった教訓を省みると、非力だが、道政に対する道民の信頼と期待、そして負託に、少しでも応えたいと考えた。

監査委員になると、普段の議員活動に加えて、毎月の監査委員会議のほか、

道の出先機関がある道北の宗谷、上川、道南の渡島、道央の後志、胆振や空知、道東の根室、釧路、十勝や網走などの各管内への出張がある。列車あり、飛行機あり、バスあり、公用車あり、札幌市内を含めて、全道各地を廻った。

身近にあって利用しやすい列車での移動は、乗車時間を有効に活用できるが、片道約六〜七時間に及ぶ車内では、車窓の風景は何回かの往復で見飽きるし、老眼鏡を手放せなくなった昨今では、小さな活字の読書は逆に目の疲労が溜まり、気忙しい毎日の疲れも出て、ついつい睡魔に負けてしまうことが多かった。

それでも、四季折々の変化に富んだ車窓の風景、街並み、窓越しに見える大自然、現地の職場では、新しい発見、新たな人々との出会いもあり、厳しくも、変化に富んだ地域の暮らし、北海道の磨かれていない潜在力を目の当た

りにし、有意義な時間を共有し、何物にも代え難い貴重な財産を得ることもできた。

◇ ◇

私は今春で、平成七（一九九五）年四月初当選以来、四期一六年間続けてきた道議会議員としての活動に区切りをつける。

今後は、新しい道政の担い手になる皆さんに、元気な北海道、明日が見える北海道の再建、新しい歴史の創造に、全力を尽くして戴きたいと切望する。

新たな発想力、発言力、行動力を持ち合わせた新しい人、若い人に、私の万感の思いと期待を託したい。

この誌面をお借りして、多年のご支援とご協力に心から感謝し、お礼を申し上げます。「忙中一筆」への寄稿とす

△さわおかのぶひろ・北海道議会議員△